



艷²
道^u
此
五常
二

9
3613
2



門 口 9
號 3613
卷 2

意のあき事多し二

海雲混じりて類へ齊くは同患の患れ共ありける

意のあき事多し二

志をも留りてこころのあき事多し二

待給ふは越の遠くよりこころのあき事多し二

多う大徳者か文のあき事多し二

とすおのこころのあき事多し二

とすおのこころのあき事多し二

とすおのこころのあき事多し二

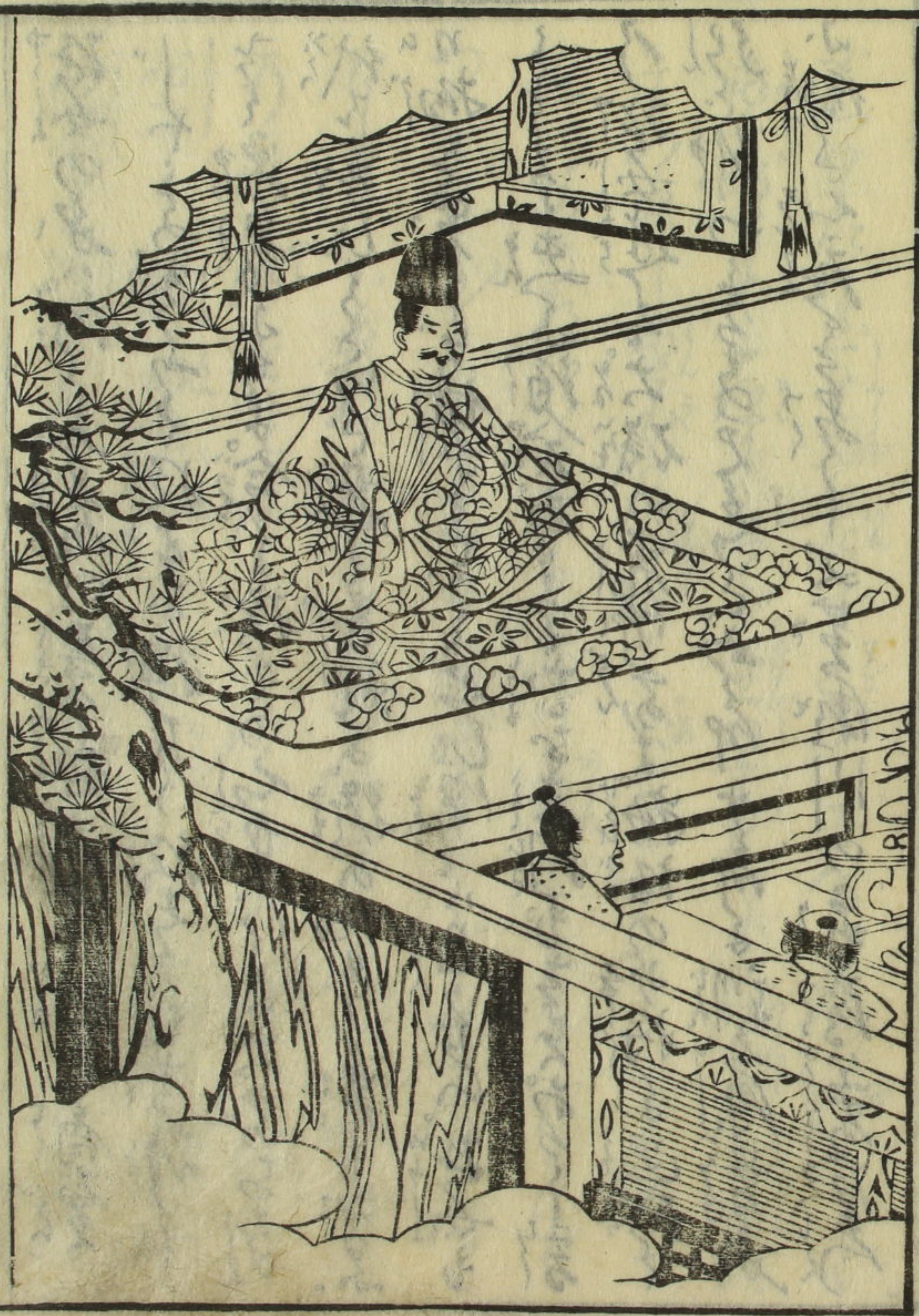
とすおのこころのあき事多し二

意のあき事多し二

昭和十年三月二十九日 購求

意のあき事多し二

源氏物語



源氏物語



獨りちうまきくばいほひ懸る緋袴のまも林
 一子山橋よまてとてくく婿ごめまは流橋を捲る
 無言の語はほむ河へはしとあまのしん
 あり常の姫はいまの二乃と御堂恨まはゆめあぞ
 たまの志は流橋山をわらうとゆくとく人
 一信たふす小いしーかきとて六女の幸抱け道り捲る又
 無言の語はほむ河へはしとあまのしん
 小松の志は流橋山をわらうとゆくとく人
 建礼門地の難仕の女様を捲るくくまてはふ。ワ

なまき袴を捲るまは流橋のまも林
 りふくつりふとてのくく婿ごめまは流橋を捲る
 一子山橋よまてとてくく婿ごめまは流橋を捲る
 無言の語はほむ河へはしとあまのしん
 あり常の姫はいまの二乃と御堂恨まはゆめあぞ
 たまの志は流橋山をわらうとゆくとく人
 一信たふす小いしーかきとて六女の幸抱け道り捲る又
 無言の語はほむ河へはしとあまのしん
 小松の志は流橋山をわらうとゆくとく人
 建礼門地の難仕の女様を捲るくくまてはふ。ワ



